

「「赤い靴」をめぐる言説」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿井, 渉介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008689

「赤い靴」をめぐる言説」について

阿井 渉 介

『国語論集9』を惠与いただいた。

拙著『捏像』はいてなかった赤い靴 定説はこうして作られた』(徳間書店の内容の一部が、冒頭に掲げられた亀井秀雄氏の論文「赤い靴」をめぐる言説に引用され、論じられているため、親身に読ませていただいた。文芸評論として大変興味深かったが、一抹怪訝な思いにつきまとわれ、ついに私拭できなかった。

文芸や国語、その研究者たちのあいだにまで汚染が及んでいるのでは、という懸念に背筋が冷えた。

ここに論じられている、童謡「赤い靴」には実在のモデルがあったという説は、北海道テレビが詐術を弄してでっち上げた、一点の事実も含まない虚構だからである。

怪訝な思いとは、テレビの低劣なしらえ物を基に、高次の文学論争をすることに意味があるのだろうか、という疑問である。

このような文章を書くたびに引用しなければならず、そうすればするほど捏造物が世にはびこる現象を見てきて、もはやうんざりしているが、北海道テレビが捏造した「お話を、左に紹介しなければならぬ。

きみという名の私生児を背負った若い女かよが明治三十六年、函館に渡った。ここからは平民社の若手青年と恋愛、私生児きみを義父の世話で函館のアメリカ人宣教師の養女に出し、青年と結婚して、ともに平民農場に入った。やがて農場は破綻し、かよ夫婦は札幌に出て、「青年は新聞社に勤めた。そこに青年の同僚として入ってきた

たのが、若き日の野口雨情だった。」かよはきみのことを雨情の妻に話し、伝え聞いた雨情が十数年後童謡「赤い靴」として発表した。

この括弧や句読点まで入れて二百二十六文字のうち「でくくった四十二文字、つまり約五分の一だけが事実で、あとは全て仕組み仕掛けられた虚構である。

もう少し詳しく述べてみよう。

「虚構は、まず北海道テレビのドキュメンタリー番組『赤い靴はいてた女の子』として、世に提供された。地方局制作の番組としては珍しく、キー局のネットに乗り、全国に放送された。評判を呼び、制作プロデューサー菊地寛氏は同タイトルの本を出版した。この二作品が元になって、『虚構』は様々に敷衍され、事実というところになってしまった。

拙著『捏像』はいてなかった赤い靴 定説はこうして作られた』は、菊地プロデューサーの本『赤い靴はいてた女の子』を検証し、その捏造を批判した。

ここではテレビ番組『赤い靴はいてた女の子』のほうを検証し、その捏造を觀察してみる。

(テレビ番組制作の責任は、本来テレビ局が有する。従つて、この稿はテレビ局に対しての批判でもあるが、ただこの番組の場合、ほとんど菊地プロデューサー個人の作品というべきであるため、氏追求の趣が強くなった。無論、この捏造番組に関する北海道テレビの責任も重大であることは言をまたない)

驚くべきことに、一時間番組であるドキュメンタリー番組は、ある老女が北海道新聞に投書した一文の中にあった「私の姉は野口雨情の童謡『赤い靴』に歌われた少女だという、一句のみに依拠していた。投書の関係箇所だけを抜粋して示す。

□ □ □の箇所には、これを書いた老女の本名が載っている。

幻の姉「赤い靴の女の子」 □ □ □

赤い靴

はいてた女の児

異人さんにつれられて

行っちゃった

横浜の

波止場から舟にのって

異人さんの御国に行っちゃった

詩人野口雨情は私の長姉君子をこのように歌っている。

彼女は私の父鈴木志郎の長女で明治の末期に、アメリカ人の宣教師に養女として貰われ、アメリカに渡っている。

(略)

明治三十八年四月、当時の言論界に大きな役割をはたした社会主義者一統の平民新聞の発行所平民社の有志が虻田真狩村に十一町歩四反の土地を入手し、共同経営の「新しき村」の理想をもつて開拓事業をはじめた人々十余名の中に父の名を見いだすことができる。

(略)

しかしこの農場も明治四十年解散のやむなきに至っている。

(略)

父母はこの解散の前に札幌にでて北門新報に入社している。同僚に、石川啄木や野口雨情がおり、父母は、雨情夫妻と同市山鼻に比較的広い借家を借りたので同居していたらしい。母の話によれば野口さんは温厚な人であること、奥さんは郷里の裕福な家庭のお嬢さんで贅沢な衣類を沢山持ってきたが、新聞社の給料不払いのためにほとんど質に入れてしまったこと、生まれて間もない男の児がいて、それが私の姉信と同じ年であるため非常に親しくしていたこと、従ってアメリカに渡った長姉君子のことも話したらしく、それを雨情が童謡「赤い靴」に書いたと思われる。

明治四十年秋には、啄木、雨情らと共に、小樽に創立された小樽日報(出資者山形勇三郎、社長白石義朗)に入社しているが、この新聞も創刊当時から紛糾が絶えず父母の話によれば、啄木の野心から、主筆岩泉江東を排斥して好人物の雨情を主筆に据え、自分が実権を握ろうとしたことであるが、この間の詳しいことは啄木の日誌「小樽のかたみ」に詳細にでているので省略するが、父のことについてはこの文中と、歌集「悲しき玩具」の中に氏名もでているので興味のある方は読んで頂きたい。

このようないきさつから、同年末から翌四十一年にかけて三名とも退社、父母は再び帰農したらしい。

(略)

幼くしてアメリカに渡った長姉君子のことについては、その後風の便りで数年後死亡したとことであるだけで、永眠の場所、墓地等については知ることができなかった。

(略)

私の生まれる十年も前に、日本を去った姉の顔を偲ぶよしもないが、臉をとじると、赤い靴をはいた四歳の女の子が、背の高い眼の青い異人さんに手をひかれて嬉々として横浜の港から船に乗って行く姿を幻の様に思いうかべることができ

きる。

(主婦Ⅱ上川管内中富良野町在住)
抜粋は全体の半分ほどの量である。ほとんどは、老女の自分史にすぎない。「赤い靴」の女の子だという姉に関するところは、啄木の日誌などのような文献もなく、証拠らしきものは一切ない。

この投書に菊地プロデューサーは触手を延ばし、昭和五一年春、清水市に出向き、市役所で老女の母の戸籍を調べた。そして、次の三カ条を確認した。

一、投書にある長姉君子の本当の名前はきみ、明治三五年七月十五日生れの私生児(つまり老女とは父親の違う姉妹)

二、きみは明治三七年九月十九日付で江尻町(現在の静岡市

清水区)佐野安吉の養女として入籍(佐野安吉はきみの祖母の再婚相手、つまり義理の祖父であることは、のちに老女が証言)

三、きみは明治四四年九月十五日東京麻布区において死亡

老女の投書の内容とまったく相違、背反している。『赤い靴』にも、北海道にも、繋がる箇所は一点もない。

菊地プロデューサーは老女に問い質し、さらに次の四カ条を明らかにした。

四、老女は姉を君子という名だと思っていた。

五、姉きみは、両親鈴木志郎とかよのあいだに生れた、長女だと思っていた。(そのように父母は言っていた)

六、佐野安吉は、祖母の内縁の夫だったと知っていたが、姉きみが生後一年で、彼の養女になつてゐることは知らなかった。

七、姉きみが養女に行つて数年後に死んだことは知っていたが、九歳のとき東京で、とは知らなかった。

老女の投書は大半思い込みによるもので、信憑性はごく薄いと確認したのである。番組制作にとつては、絶望的な結論だったはずである。「文芸春秋」のコラムにおいて、菊地プロデューサーは、これから自分の調査結果を上げて、次のように述べている。

これでは「赤い靴」にはとうていむすびつかない。

ところが、それら以外の事実を一個も発見、発掘できないまま、

菊地プロデューサーは二年後の昭和五三年一月、テレビ番組『赤い

靴はいてた女の子』の制作を開始、秋には放映に至る。

ドラマにはシナリオ(脚本)がある。

同じように、ドキュメンタリー番組には構成台本というものがある。台本には、カメラが撮るべき風景や人物、事物が台本作者によって指定されている。リポーターのいる番組だったら、リポーターが喋るセリフが書き込まれている。画面の状況を解説したり、メッセージを伝えるナレーションも書き込まれている。

『赤い靴はいてた女の子』という番組にも、台本は存在した。(菊地プロデューサーが別名で書いているようだ)番組のビデオから台本を再現するという形で、どのようなことが行われたのか、観察してみよう。

Tとはテロップ(字幕)、Nとはナレーション、ここでは俳優の柳生博さんが担当している。

まず冒頭のシーン

白髪を無造作にうしろに束ねた老女が、うつむき加減に座っている。そして、呟くように語り出す。

老女「わたしには父違いの姉がおりまして、生きていると七五歳になります。小さいときアメリカに養女として貰われていきまして、そのことを野口雨情さんが童謡に、赤い靴の女の子という題で、姉きみのことを書いて下さいました」

この老女自身の投書を読んでもあれば、一体なにが老女に起きたのかと怪しむ。

いきなりヤラセによる捏造が仕掛けられているのである。

猛烈な地吹雪に画面が真っ白になる。

T「明治36年 北海道」

N「明治三六年の冬、乳飲み子を抱えた一人の若い女が津軽海峡を越え、開拓半ばの北海道に渡った」

菊地プロデューサーは、制作開始に先立ち、札幌藤女子大学山田昭夫助教授(当時)を訪ね、山田氏が昭和四三年五月二四、二五日に北海道新聞に書いた『平民農場の興亡…北海道の新しき村』と、その他文献資料を教示されている。

そこには若い女「岩崎かよが初めて渡道したのは明治三八年十二月、そのとき乳飲み子を抱えていなかったことが、はっきり書かれている。

タイトル

「ドキュメント 赤い靴はいてた女の子」

このタイトルによつて、この番組の内容は「事実」だと宣言されているわけである。ところが、このタイトルまでの短い時間に、「事実」ではない、明らかなウソが三つも四つも重ねられている。

街頭にテレビカメラが出ればVサインに構えた子供たちがひしめき、大人たちもさもしい表情で遠巻きにしている。だれもが「テレビに出たい」のだらう。

老女は、あとになって菊地プロデューサーにだまされたと怒っていたというが、自分が知らなかったことも知っていたことにして、プロデューサーに言われるがまま演技していたのだから、だまされた

というには当たらない。ちよつと硬質な投書の調子からは意外に思えるが、目立ちたがり屋のお婆ちゃんだったのだろうか……。

菊地プロデューサーは、そういう老女を利用して、「どうていむすびつかない」ことを、テレビの詐術で結びつけてしまった。

いまここにさらにいくつかのシーンを抽出して、台本の形に戻し、菊地プロデューサーの捏造を指摘してみる。

まずは少女きみを養女にした、ヒューエット宣教師を発見したと称する最も重要なシーンである。カメラは函館のメソジスト教会の日本人宣教師を映す。

日本人宣教師〇〇さんがヒューエット師の在任記録を示し、そして語る。

〇〇「可能性はあることですね。それはありうることだと思えますね。教会として、そういうことがいけないとか、そういうのがめはありませんし、教会の場合は宣教師はほとんどご家族で来ていますからね。ですから、お子さんを養女にする、養子にするということはありません」

このシーンで日本人宣教師〇〇さんが語っているのは、一般に來日アメリカ人宣教師が日本人の養女を取ることを、教団本部としてとがめることはなかったということである。〇〇さんは、その手の中のヒューエット師の記録には「日本人の女の子を養女にした」という記載がないことを、はつきりと菊地プロデューサーに告げたはずだ。

しかし、その一番大切な部分はカットされ、一般論を述べている

ところを摘み取られ、あたかもヒューエット師個人についてしゃべっているように偽装している。

よく使われるテレビの捏造手口である。

そして、続くシーンは陽光あふれる花畑で、次のナレーション(N)がかぶせられる。

N「霧の中から一筋の光が見えた」

函館メソジスト教会では、いかなる証拠も見つけ出されていない。にも関わらず、あたかもなにか強力な証拠が提示されたと視聴者に思わせ、期待させられるナレーションである。次の場面で、「一筋の光」「一筋の光」は追跡されると、だれしもが考える。

ところが、「一筋の光」は追跡されず、老女が電車で父母のいた平民農場跡に向う姿に画面は切り替えられる。

平民農場のあつた留寿都村で、老女はその両親が大正の初めに村にいたという、それがわかつたところで『赤い靴はいた女の子』というテレビ番組にとつてはなんの証拠にもならぬ説明を、村役場で受けるだけである。視聴者の期待は、函館メソジスト教会でなんらかの証拠が見つかったらしいという印象だけを残して、巧妙に外されるのである。そして、その印象をさらに増幅する、次のシーンになる。

東京 青山学院大学キャンパス

職員や外国人教授が登場して、次のナレーションがかぶせられる。

N「きみを養女にした宣教師はだれなのか、メソジスト派の日本における総本山、青山学院大学を通じて、アメリカ本部に照会が行われた」

キャンパス内

メソジスト教会資料室で資料を調べている人物、××氏を映し出す。

××「ただまあ、ヒューエットが可能性があるというのは、夫婦で来て、子供がいなかったということですね」

一体なぜヒューエット宣教師なのか、一つも述べていない。しかも、函館の教会で日本人宣教師○○さんを使ったシーンと相似形をなしていることに気が付かれるであろう。

ここでもまた、一つの証拠も発見されない。

××氏は「ただまあ……」と言う前に、手にした資料を示し、「この通り、ヒューエット宣教師が養女を貰った記録は、ここにもないし、アメリカ本部の記録にも一切ない」と、照会の結果を伝えたはずだ。

菊地プロデューサーがヒューエット宣教師をつまみ上げたのは、当時函館にいた子供のいない宣教師夫妻という条件からだろう。しかし、精査すれば、ヒューエット師が条件に適應しないことを、彼は知っていた。

同種のトリック・シーンが、さらに重ねられる。

××氏と外国人が話している。外国人は次のような文字で

紹介される。

「経営学部教授 在日宣教師死亡記事係 △△△・△△△△△さん」

××「彼は一応一九〇八年にアメリカに帰っていますね。コロラド州デンバーに帰っているわけですけど」

△△△「バーティルズさんはカリフォルニアのほうに……」

××「そちらのほうの資料を見ると……」

このシーンの××氏と△△△外国人教授の会話は、筆者が勝手に省略してこうなっているのではない。実際に、これだけしか喋っていないのである。ここでも一切証拠がないことが△△△教授と××氏の間で話されているはずだ。しかし、その部分はカットされ、なんの意味もなく、何事の証言にもなっていない。

にもかかわらず、次のシーンになると、この部分が大変なことに使われる。

確認しておくが、ここまでにテレビの画面は、老女の姉が「赤い靴」の女の子だという証拠どころか、「可能性」も、全く提出していない。少女きみとヒューエット宣教師のあいだに、いかなる繋がりも発見してはいない。

アメリカの地図が映し出される

そこにナレーションがかぶせられる

N「きみの生い立ちに余りにも一致しているヒューエット師の足跡、他にバーティルス師の名前も挙がった。スタッフはアメリカに飛

んだ」

余りにも一致している？

少し重複するが、きみとヒューエット師の経歴を資料文献から抽出し、併記して示す。

明治三二年（一八九八）

チャールス・ヒューエット宣教師、東京着任

明治三二〜三三年

ヒューエット師、仙台赴任

明治三三〜三八年

ヒューエット師、札幌赴任

明治三五年七月十五日

岩崎きみ、静岡県庵原郡不二見村に岩崎かよの私生児として生れる

明治三七年九月十九日付

きみ、静岡県庵原郡江尻町佐野安吉の養女として入籍

される

明治三八〜三九年

ヒューエット師、一時帰米

明治三八年五月

佐野安吉、平民社の若手原子基、深尾韶とともに渡道

明治三八年十二月

佐野安吉、岩崎かよを迎えに行き、北海道虻田郡真狩

村（現在の留寿都村）移住

明治三九〜四〇年

ヒューエット師、再来日函館赴任

明治四〇〜四一年

ヒューエット師、札幌赴任

明治四一年（一九〇八）

ヒューエット師、帰国

明治四四年九月十五日

きみ、東京麻布区において死亡

（一覽の通りである）

「余りにも一致している」どころか、時間的・空間的に一点触れ合うところもない。

前のシーンで、外国人教授などによつて一致点が発見されたという印象を作り、あたかも「事実」の発見が青山学院大学によつてなされたが如く偽装されている。

納豆がダイエットに有効だ、と説くテレビ番組があつた。アメリカ人教授に全く別のことを喋らせて撮影し、「有効説」を日本語吹き替えて教授の口の動きに合わせて流した、それと同種の捏造である。

なんの一致点も根拠もないまま、ヒューエット宣教師がきみを養女にしたことが、もうここからは確固たる証拠として扱われることになるのである。

これほどの出鱈目が通用するわけがないと、だれしもが考えるところだ。

テレビには、そういうことができるのである。

投書によつて発端を作つた老女は、父母が雨情と同居したと語つてゐる。同居の間に、母かよが雨情の妻に「娘のきみはアメリカ人宣教師の養女になつて、アメリカに行つてしまつた」と話し、それが

雨情の心に留まった……。

母はそう語っていた、と老女は言う。

しかし、ヒューエット宣教師がきみを養女にしていたら、「母はそう語ることはできなかったはずなのだ。」

なぜなら、かよ志郎一家と雨情一家が同居したとき、ヒューエット宣教師がアメリカに帰ってしまったていなければ、「娘のきみはアメリカ人宣教師の養女になつて、アメリカに行つてしまった」とは言えない。

かよ志郎一家と雨情一家が同居したという明治四十年、ヒューエット宣教師はまだ帰国していない。

日本にいたのである。

札幌の教会にいた。

志郎、かよ、そして雨情が当時住んでいた同じ札幌に……！

きみが宣教師夫妻に養女に出されたのがウソでなければ、一緒に札幌に住んでいなければならないが、このころ札幌で撮られた宣教師夫妻と周囲の人々の写真に、きみらしい少女は影も映っていない。そして、この写真を菊地プロデューサーは隠蔽している。

付言しておけば、明治末期の日本で正式に養女にしないまま日本人の子供を外国人が外国に連れ出すことは絶対できなかった。

幕末から引き続き、良民が奴隷として海外に売られることを警戒していたのであり、日清、日露戦争のために整えられてきた戸籍制度は、現今以上に厳重なものだった。

ヒューエット宣教師は、きみという少女とはなんの関係もなかった。養女どころか一時預かった形跡もない。青山学院大学がヒューエット宣教師を探し出した責任を担われた同じ手口で、ヒューエット師は菊地プロデューサーによって、無理やり「少女を養女にし、病気になる」と日本に置き去りにして帰国してしまった宣教師に仕立て上げられたのである。

童謡「赤い靴」に関して、野口雨情自身が自作を語っている文章があるので、その全文を次に掲げる。

この童謡は、小作『青い眼の人形』と反対の気持を歌ったものであります。この童謡の意味は云ふまでもなく、いつも靴はいて元氣よく遊んでいたあの女の児は、異人さんにつれて遠い外国に行つてしまつてから今年で数年になる。今では異人さんのやうにやつぱり青い眼になつてしまつたであらう。赤い靴見るたび異人さんにつれられて横濱の波止場から船にのつて行つてしまつたあの女の児が思い出されてならない。また異人さんたちを見るたびに、赤い靴はいて元氣よく遊んでいたあの女の児が今はどこにどうしてゐるか考えられてならない。という気持をうたつたのであります。

ここに注意を申し上げて置きますが、こ

の童謡は表面から見ただけでは、單に異人さんにつれていった子供といふにすぎませんが、赤い靴とか、青い眼になつてしまつたらうといふことばのかげには、その児に対

する惻隱の情がふくまれてゐることを見通さぬやうにして
いたいただきたいのであります。」「童謡と童心藝術」

解説の要はない。これを読んでなお、「赤い靴」の女の子はきみだ、
異人さんはヒューエット宣教師だ、と考える人はいはずだ。

私事になるが、筆者はいま東京大学大気海洋研究所の調査船
白鳳丸上にあり、「うなぎ産卵場調査」に携わっている。船上では、
筆者以外は全て研究者である。食卓でさえ、話題はほとんど海洋
や魚類についてあり、ときには鋭い批判の応酬がある。

応酬の基底には必ずデータがある。

どのようなデータも、何人もの研究者によつて追試され、検証
されているがゆえに、だれの耳にも妥当性が理解できる応酬にな
る。どのように激しい応酬でも、終れば清々しい空気が漂う。

文学においては、事情は少し異なるかもしれない。しかし、ある
時代の日本人の精神をある文芸作品を通して論じようとするな
ら、香具師的な思惑でつち上げられた捏造物をデータにしては
ならないのではないか。

データが精査されたものでなければ、研究の成果にも狂いが生
ずるのは、独り科学のみではないと私には思われる。

拙著『捏像』はいてなかった赤い靴 定説はいかに作られたか』中
で、私は「赤い靴とは雨情にとつてなんであつたか」と自問し、それ
は雨情が平民社の若手であつた鈴木志郎から聞いたかもしれない
赤い箱車の抽象であり、「社会主義」だと書いた。

当時、平民社の若手活動家が執つた社会主義宣伝の手段が、赤
い箱車である。小さな赤く塗つた箱車に、社会主義関係の書籍や
パンフレットを積んで街道を行き、先々で演説や集会を開きなが
ら売り歩く、いわゆる「伝道行商」である。若き日の荒畑寒村など
が、これを行つてゐる。

そのようなわが国社会主義黎明期の活動は、私には小さく脆い
ものとしか感じられず、雨情の中で後日の印象として、赤い靴＝
赤い箱車＝社会主義といった抽象化が起きたのではないかと思つ
いた。これを亀井氏は次のように批判しておられる。

雨情の生活史に強いて関係づける読み方は、これも「実話」
読みでしかないのである。

私はここで「赤い靴＝赤い箱車＝社会主義」説を取り下げる。

一つには、「赤い靴＝社会主義」説は拙著出版以前に、永六輔
氏によつて唱えられていたことを知つたからだ。

さらに一つは、亀井氏の山口昌男氏批判の論文にある、次の
一節に因る。

雨情が「青い目の人形」や「赤い靴」を発表したのは、鈴木志
郎と同僚だつた明治四十年から数えて十四年後のことである。
「雨情の心にしみわたり、沈殿し、後になって、つまり大正十
年頃、雨情の詩心に触れる程度にまで再浮上して、「赤い靴」
という童謡になつたのであらう」とは、あまりにも安易な心理
的憶測であらう。

いかにも、その通りだと思う。

そして、だとするならば、きみが「赤い靴」に歌われた少女だという説は、雨情側から見て全ての根拠を失うことになる。

また私は、次の一説にも指嗾された。

少なくともこの時期の雨情は、童謡のなかに「生活の希望」や「主義運動」を持ち込むことを警戒していた。現在の研究者や評伝作家は、雨情が若い頃に社会主義の運動に共感を抱いていた事実や、雨情の実生活上の経験から彼の作品のモチーフを解釈したり、思想的な意味づけに走ったりする傾向が強い。ところが雨情は、童謡を実生活の出来事に還元したり、社会的、人生論的なメッセージ性を引き出したり、主題論的に論じたりする読み方を拒む立場で、童謡の創作を考えていたのである。

彼の求めていたのは「ばかばかしい位無邪気」な作品であつて……。

老女の投書には、雨情一家との同居はある程度の期間に亘るが、ごくときニユアンスがある。

しかし、この同居にも根拠はない。

仮に同居があつたとしても、雨情の年譜を詳細に読み込めば、最大十日間ばかり、しかもその期間、雨情は小樽にいて、ほとんど帰宅していないことは明白なのである。

テレビ番組中最大の違和感は、私生児を生んで養女に出したば

かりの女が、そのことを現今の女のように多少は誇らかに他人に話すという、根本的時代錯誤が平然とまかり通つてたことだ。

このことばかりではない、番組中には無知からか無恥からか、時代錯誤が平然と並んでいる。

雨情に関する文献資料の中に、鈴木志郎、かよという妻は欠片も存在しない。

疾風怒濤時代と言つていい雨情の北海道時代の、ほとんど瞬時にすれ違った鈴木志郎を、十数年経つても、雨情が憶えていたわけがない。まして、顔を合わせたことがあるかないかも怪しい、その妻のことなど記憶の片隅にさえなかったはずだ。

だが、私は自分の「赤い靴」赤い箱車「社会主義」という思いつきにいい気になつてた。これを書くためには、雨情が鈴木志郎を憶えていなくてはならない。雨情と鈴木志郎のつきあいは、わずかに三箇月ばかり、啄木との熱狂的な交情に比べ希薄なものだったが、そのことを無視した。

十四年という歳月から故意に視線を逸らした。

私は亀井氏の論文に触れ、冷水を浴びせられた気がしたが、清々しい思いで首肯した。私は「赤い靴」赤い箱車「社会主義」説を誤謬と認める。

但し、少し気にかかるところは残る。亀井氏の論文には、次のような箇所がある。

静岡の「母子像」や留寿都の「母思像」、小樽の「赤い靴親

子の像」などを作った人たちのほうが、むしろ健康な精神の持ち主だったと言えるだろう。なぜなら、これらの人たちは、自分が作っているのは「赤い靴」から誘発された虚構の像であることを自覚している。だが、菊地寛や小池喜好や山口昌男や阿井渉介たちが「事実」を描くやり方には自己相対化の自覚が欠けているからである。

「これらの人たちは、自分が作っているのは「赤い靴」から誘発された虚構の像であることを自覚して」はいない。それは彼らが像に付した碑文を一読すれば、明白である。彼らを誘発したのは、菊地プロデューサーの捏造した虚妄である。

文芸的比喩だとしても、なぜ「これらの人たちが小池喜好、山口昌男、阿井渉介より健康な精神の持ち主ということになるのか、理解できない。

文芸的ではない人々を文芸的な思维で囲い込まないほうがいい、と私は思う。

なぜならば……。

ここに上げられている像のうち、特に小樽の「赤い靴 親子の像」を作った、宗教関係の人たちには、再三に亘って、テレビ番組と本『赤い靴はいた女の子』は、虚偽と捏造でしかないから、そのようなものに基づいて、子供たちからさえ金を集めて像を作ろうとすべきではない、と私は警告している。

その返事は驚くべき、奇妙なものだった。

「親子三人の像を建設段取りが進行中です。私共のこの像建設に馳せる想いは、史実論争の外にございます。戦争と紛争、悲劇にさらされている子どもたちへの切実なる願いを込めて云々」

史実も論争もない、あるのはただ「捏造」だと知らせてやった返事が、これである。

親子三人というのは、きみを見たこともない鈴木志郎と、かよ、きみのことだという。

志郎、かよ夫婦は、きみの異父妹に当る赤子を生後十カ月で、飢え死に同様に死なせている。そういう志郎が、見たこともないきみと三人で納まって「親子の像」？

きみは「戦争と紛争」に、なんの関係もない。そんなことにもまして、「戦争と紛争」に真にさらされている子どもたちに、像は一体なにほどの救済をもたらすと、この宗教関係者たちは考えたのか。「戦争と紛争」なら、日々の新聞に「あなたがいま百円出してくれるなら、戦争と紛争地域で何人の子供の命が助かる」といったような広告が出ている。像を作るのに費やした千万円単位の金があったら、と私は考えざるをえなかった。

同じことは、函館の像建立者たちにも拙著を送り伝えた。

彼らは事実などどうでもいい、という考えを返してきた。

彼らにとって、像はなんらかの利を生むものなのだ。建立後の運営約款に、はつきりと利を分ける方法を記しているものさえある。

横浜の「赤い靴」研究者齊藤邦彦氏は、函館の建設委員会の事務所に電話で「なぜ函館に像を作るのですか」と訊いたという。

「きみとかよが二年間函館にいたからです」というのが答えだった。

「それはどのような文献資料でわかったのですか」

「菊地先生(菊地プロデューサー)は北海道テレビを退職後北海道内某私大の教授に納まつておられたのご本によつてです」

「あの本に書かれていることは、菊地さんの創作で事実ではないですよ」

「わたしどもはそうは考えません」

それで、電話は切られたという。

「そうは考えない」のが、「菊池先生のご本」と私が建設委員会に送った『捏像』はいてなかった赤い靴 定説はこうして作られた』を読み合わせての結果でないことは明白である。

「どうしようもありません」と、齊藤氏は私に伝えてきた。

小樽や函館の像建設委員会の人々のような精神をして、健康的と評することは、この種の人々の跋扈を応援し、文芸的贗物の後押しをするようになるのではなからうか。

亀井氏のお考えが純粹に文芸的なものであつても、得たりやおうと商売に利用するのが、この種の人々なのである。

「菊地寛や小池喜好や山口昌男や阿井渉介たちが『事実』を描くやり方』というくくりの中に、菊地寛をまぎれ込ませているのは、

いかがなものだろう。菊地プロデューサーが一つも「事実」を書いていないのは、先に例証したことだけでも瞭然としているはずである。「もし菊地寛の『赤い靴はいてた女の子』の記述が全て事実に基づいているとするならば」とか「菊地寛の調査を信じる限り、」と亀井氏は書かれている。

「菊地寛の(略)記述が全て事実に基づいていないことは、テレビ番組を検証してみれば明白である。

「菊地寛の調査」も拙文の冒頭から四〇六頁目に引いた調査結果七項目以外の、たとえばアメリカにおける調査などは、調査などではなく捏造手品のネタ仕込みであつて、「信じる」に足りない。

そのところを曖昧にすれば、論議は混濁するばかりではなからうか。

私は事実だけを書いた。「赤い靴」赤い箱車」社会主義」だけは無念だが、他に慙愧はない。

山口昌男氏の論文の一部「青い眼をした人形と赤い靴はいてた女の子の行方・日米関係のアルケオロジ」には、次のような箇所がある。

「赤い靴はいてた女の子」にモデルが居たことは、今日の童謡に関心を持つ人には知られている事実である(小池喜孝『平民社農場の人びと』明治社会主義者のロマンと生きさま『現代史出版会、1980年一一一—一九頁。モデルというのは「佐野きみ」という九歳でこの世を去った女の子であつた。

小池氏の著作を読むことで、私は菊地プロデューサーの詐術を暴く最初のきっかけを得たが、小池氏がやすやすと菊地プロデューサーの術中に陥つて、テレビ番組を信じてしまっていることを、実に歯がゆいと思った。菊地プロデューサーの捏造を、最初に実証的に暴ける立場にいたのは、小池氏だったからである。

山口氏は菊地寛『赤い靴はいてた女の子』を読んでいないようだ。そのためであろう、なんらの疑いもなく、「赤い靴」に実在のモデルがあつたとしている。

あたらず碩学が、と思うのである。

せめて直接、菊地寛著『赤い靴はいてた女の子』を読んでもいれば、そこに充滿する欺瞞に気がついたのではないかと惜しまれる。

山口氏は、かつて三角寛が自分の書いた大衆小説にサンカを登場させ、全てが自らの調査にかかる事実であると偽り、挙句でつち上げのサンカ研究論文によって博士号まで獲得し、以後の民俗学研究に混迷を与えた事件をご存知だろう。

菊地寛プロデューサーによる「赤い靴はいてた女の子」調査は、三角寛のサンカ研究に匹敵するでつち上げである。世間一般的に言えば、もつと重大な実害を広げている。

雨情が「赤い靴」と『青い眼の人形』の詩を書いた二十年後、日米関係が悪化して、その十数年前アメリカから日本の子供たちに贈られた人形が焼かれたり壊されたりした。このとき、雨情の童謡を思い浮かべた者は、確かに少なくなかつたろう。

亀井氏の論文によれば、毎日新聞は「仮面の親善使青い眼をした人形憎い敵だ許さんぞ 童心に聞く処分」と見出しに掲げ、青森県鰺ヶ沢国民学校五年生に、贈られていた人形の処置を問い、それに対する児童の回答は、破壊八十九名、焼いてしまへ百三十三名、送り返せ四十四名、目のつく所置いて毎日いじめろ三十一名、海捨てる三十三名、白旗を肩にかけて飾っておく五名、米国のスパイと思つて気をつけよ一名、だつたと報じ、「憎いアメリカからの贈物である以上叩きこはせと決戦下日本の観念が童心にも根強く織込まれてゐる」というコメントは毎日新聞の見解と見るべきだ、と亀井氏はしている。

ここではマスコミが集団ヒステリーを煽っている。マスコミがこうに動いたときの怖さを、テレビはもつと強力に秘めている。

この鰺ヶ沢にも「赤い靴」の像がある。

この像の除幕式を伝える二〇一〇年十一月四日の『東奥日報』の記事を、札幌在住で啄木研究家、そして「赤い靴」の事実を調べている福地順一氏が送ってくれた。

童謡「赤い靴」記念像除幕

鰺ヶ沢モデル養女の義父の出身地

家族愛伝える新名所

童謡「赤い靴」のモデルとされる幼女・岩崎きみと、生き別れた両親をしのぶ親子3人の記念像が鰺ヶ沢町の海の駅「わんど」駐車場に建てられ、3日、除幕式が行われた。同町は、きみの義父・鈴木志郎の出身地。ゆかりの地の一つという鰺ヶ沢の歴史と家族愛の尊さを

語り継ぐ新たな名所となりそうだ。

記念像の建立は全国で7カ所目。きみ、志郎、実母、かよの親子3人が寄り添う坐像で高さは台座を含め約2メートル。人造ブロンズ構造で青銅色を基調に、きみの靴を赤色に仕上げた。台座には童謡「赤い靴」の歌詞と、同町とのゆかりを記した銘板を取り付けた。

除幕式では、建立実行委員会のS（記事中では実名）会長が「志郎は童謡詩人・野口雨情の親友。志郎の存在なくして「赤い靴」はできず、ゆかりの町として像建立は意義深い。文化的価値の高まりと、東北新幹線全線開業で新たな観光名所になることを期待する」とあいさつ。T（記事中では実名）町長らが祝辞を述べ、鯉ヶ沢保育所年長組15人が「赤い靴」を合唱した。

記念像を建てようと2006年、協議会が発足し、募金活動を開始。事業は本年度、町内15団体でつくる建立実行委が継承した。事業費433万円は寄付金と町助成金で賄う。寄付金は10月までに140の団体・個人などから約246万円が寄せられた。

実は、この町が像建設を計画していることを知らせてくれる方があつて、私は拙著『捏像』はいてなかった赤い靴。定説はこうして作られた『町に贈り、無心な子供や無垢な人々をだますような像は作らないほうがいい』と警告した。その後、寄付金が集まらず、計画は宙に浮いていると噂を聞き、安堵していたところ、この記事だった。

鈴木志郎はきみの義父ではない。

雨情の親友でもない。

彼の存在なくして「赤い靴」ができなかった、などということもない。

建立委員会の人々の、少なくとも一部は『赤い靴』がきみの物語ではないことを知っていた。「赤い靴」がきみの物語ではないことを知っていた。しかし、「新たな観光名所」を期待して、建立を強行した。そして、確実に町の文化の価値を下げ、像ある限り、町はその恥を背負っていくことになった。

北海道テレビ・菊地寛プロデューサーによる捏造は、いまや無知と無恥の占領域を大きく拡げ、脂照りしている趣きがある。

何度か言うようだが、テレビには真に恐ろしいところがある。

シーンを文字に還元して示すから詐術とわかるのである。テレビは作り手の恣意のままに、視聴者の心を操ることができる。

そのような例をもう少し挙げておこう。

この番組には、レポーター兼再現映像の中の「かよ」役として、倍賞千恵子さんが出演している。

倍賞千恵子さんが、リポーターとして廃屋の前で語りかける。

倍賞「かよさんがきみちゃんを生んだのは、ここ不二見村、静岡県清水市に帰ってきてからのことです。云々」

「ここ不二見村」が問題だと言っても、なんのこともわからないだらう。

「ここ」は静岡県清水市の不二見村ではない、札幌郊外のどこかだと言えはどうかだろうか。

テレビの詐術としては、ごく初歩的なものだが、考えなければならぬのは、もっと重要なシーンで使われても、ほとんどの視聴者はそのままするつと不二見村でもないところを「こは不二見村」と信じ込んでしまうという点なのだ。

このようにわからなくても仕方がないシーンではない、ちよつと立ち止まつて考えれば、首をひねつて偽装を疑つて当然のシーンも、少しも考えることをせず、視聴者は受け入れてしまうのである。

次は、きみがヒューエット宣教師ではなく、義理の祖父の養女になつてゐたことを説明するナレーションである。

N「きみはヒューエット夫妻の養女になる前に一旦形の上で佐野

安吉の養子として入籍されてゐたのである。云々」

「きみはヒューエット夫妻の養女になつた証拠など一つもないまま、いつの間にか「養女になる前に」という言葉で、養女になつたことにされている。菊地プロデューサーは一番重要な箇所を「一旦形の上で……」という、意味不明の言葉で覆つてゐる。一旦も二旦もない、きみは佐野安吉以外の養女以外になつたことはない。どこかの宣教師の元に一時預けられた形跡さえない。

昔日、狐は頭に一枚の木の葉を載せ、「コーン」と一声、バック転して美女に化けた。

いま、人は目前でそんなことをされたら、ただちに狐の尻尾を押さえ縛り上げるだろう。しかし、テレビという狐が行うバック転の前では、ただ美女に見惚れてしまう。

他人を批評してゐるのではない。

私も、最初にこの番組のビデオを見せられたとき、「うん？」と思ひながら、立ち止まつてみようとはしなかつた。まさかテレビともあろう文明機械の中で、狐のバック転が行われたとは思ひもしなかつた。裏にちゃんとした根拠があつて、こう言つてゐるのだと思わされてしまつた。

何十年昔の話、勝手に名前を借りても、借りられた本人は痛くもかゆくもないだろうと、菊地プロデューサーは考えるのだろうか。キリスト教徒には神の国がある。ヒューエット宣教師は、いまそこでこのことを知つて、自分の負わされた役目をどう思つてゐるだろう。

きみはヒューエット宣教師には一目も逢つてはいない。このあと三年生きてゐた。

映画やテレビで、太平洋戦争中の大本営発表のシーンを観ることがある。いま観れば、そこで大戦果に狂喜してゐる日本人に違和感を覚えるだろう。

現代の大多数の日本人にとつて、テレビが（軟らかな）大本営になつてゐると危惧するのは、杞憂であらうか。

テレビの捏造を知つていながら便乗して、商売や観光に利しようと像を建てる人々は、縁なき衆生と思ふしかない。テレビ番組中の捏造に、もういちいち目くら立てる気にもなれないが、童謡「赤い靴」が、三十余年間汚され損なわれ続け、今日なお被害を拡げ

ていることは、無残で見るに耐えない。

函館、小樽、留寿都の「赤い靴の女の子像」は北海道の恥だと、私は思う。

「ここ」まで、私は視点をすぼめ、「赤い靴の女の子像」というテレビの捏造を、主として技術面から腑分けしてみた。巨視的に見て、テレビという媒体と人々の関係が、もはや危険な領域に入っていると考えるから、原点を探ってみようとした。

左は、『本が死ぬところ暴力が生まれる』(バリー・サンダーズ著 杉本卓訳の一節である。

テレビで流されるイメージはあまりに速く通りすぎてしまうため、子どもの心ではそれについて考えたり分析したりすることができない。子どもたちは、コマ・シヤルで流れるものが、本当に満足を与えてくれると思ってしまう。もちろん、スクリーン上のものが気に入らなければ、チャンネルを変えたり、次の番組やコマ・シヤル休みを待つことは自由である。さらには、テレビ自体を消すことだってできる。今日では、それはほとんど労力を使わずにできる。リモコンのボタンを押せばいいだけだ。

理解しておかなければならないことは、子どもはこの種の行動を現実世界の状況にも転移するということである。彼らは一人の人間を消し去るのも、テレビを消したりチャンネルを変えたりするのと同じくらい簡単に、それくらい大したことはないと思える。よつになりつつある。

これはアメリカの子にも関して書かれた文章だが、そのまま大人を含めた私たち日本人の状況と言っていると思ふ。

著者は続けて、子どもたちが成長の各段階で、週二十五から二十八時間テレビ番組を観ることによって、「健全な人間になるために必要な自然な感情的発達をショートさせてしまう」と述べている。脳内のイメージ形

成にたずさわる部分の発達が遅れる、という研究者の意見を紹介している。

テレビ画面は、平均して三・五秒ごとに新しい画像をきらめかせる。(中略)テレビは視聴者に、目の前を通りすぎる情報、耳を通っていく情報を処理する十分な時間をあたえない。三・五秒という時間は、知的理解のためには速すぎる。

そして、著者はその先を論考している。

私たちが人間であることのとりあえずの基礎として当然のこととみなしている「批判的で自ら方向づける人間」という考えは、読み書きという厳しい試練を受けてはじめて開発されるものだ、(中略)私たちが知っている意味での「人間」は、識字の産物なのである。

釈迦に説法の冷汗を感じつつ、ここに私は引用した。

テレビは子供たちから文字を奪い、考える力を奪ってきた。そうした子供が大きくなった。その結果が、北海道で言えば、函館、小樽、留寿都の「赤い靴」像なのだ。

ここに集う方々なら、テレビに関する正確な視座を持ち、同感していただけるだろう。

ここは国語や文芸について論じられる場だからこそ、扱う資料が真つ当なものか否かについて、厳密を期していただきたいという要望を、再度提出しておきたい。

テレビの捏造ごときに惑わされず、むしろはつきりと剔抉排除して、国民遺産たる文芸作品を救っていただきたい。それのみを願つて、私はこの一文を書いた。